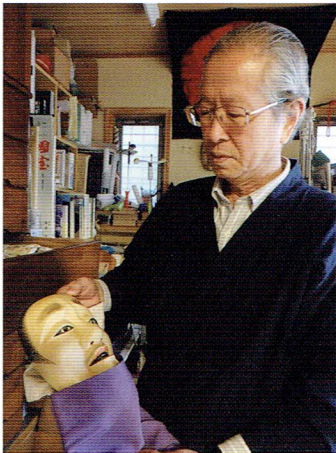


て、無条件に入れ込んだ。その6年後には、退職後の仕事として取り組みたいと、教室を立ち上げて独立することを決めた。

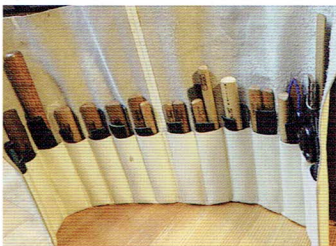
しかし、能面づくりは、そんなに早く教えたり、独立したりできるものなのだろうか。

荒さんが独立したいと相談すると、師匠は「まだ、早いね」と即断した。そこで、ひざ詰め談判で説得にかかった。「自分には、退職後の食い扶持が必要。何かしたいし、ぶらぶら遊んでいるわけにはいかない。能面をやりたい」。当時、教えてほしいという友人がすでに何人かいたことも幸いした。古文書にあった先祖の名前を継いで、「五代・杵右衛門」と名乗りはじめた。

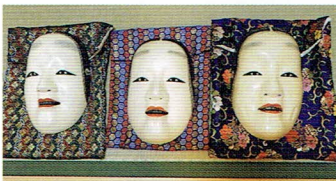
独立から6年ほど経って、東京・錦糸町と埼玉・大宮の読売カルチャーセンターで教えるようになったが、正直なところ、自分



能面は仕事場のタンスに大事に保管している



荒さんが使っている道具



難しいという女面。表情で年齢を表現する



20周年記念集には三十数点の作品を掲載

でも5年や6年で人に教えるのは無茶だったと思う。能面は打っているうちに、わからなくなる時がある。「見えなくなる」と表現するのだが、見えなくなたら、放っておく。その状態のままにしておいて、ちらちらと見ながら、なるほど、ああいう手を入れればいいのかと気づく。ものの中の迷いを整理していく、つまり熟成するのを待つ。

「6畳間を占領して、よく妻に怒られました。これ、いつ片づけるの？って(笑)」。そんな状態を取り組むから、自然に、制作ベースは1年につくらしいになってしまふ。急ぎ仕事はよくないのだ。いい能面はすつと頭に入ってきて、違和感がない。女面ほど難しいものはなく、女面で人をうならせることができればいいのかと気づく。そういうことが理解できるようにな

ったのは教え始めて10年後。人に教えることが、こんなに勉強になるのかとつくづく思った。

能面づくりはDNAだった！

荒さんは、なぜ、そこまで能面に打ち込めたのだろうか。背中を押したものが他にもあったことに気づいたのは、ほんの4、5年前のことである。

あるとき、知人が能面師を研究しているグループの機関誌を持ってきた。そこには、江戸期に磐城出身の能面師がいて、その人の職種が細工師だったという一行があった。細工師なら荒家の先祖と同じ職種ではないか。

昔は、家大工、宮大工、船大工、彫刻大工などが集団ごとにお殿様のもとに管理されていた。細工師は彫刻大工のことで、欄間やお寺の軒下の彫り物などを専門にやる集団。そして、「杵」は、相馬

藩の中で匠の位を持つ人たちが、唯一名乗ることができる字だった。つまり、細工師は能面師を輩出した集団でもあったのだ。

自分が能面づくりに魅かれるわけは、これだったのか！ 能面師のDNAが自分にもあったのだと思っただ。

能面を打ちはじめた23年。今まで打った作品は三十数面になる。2003年には「NPO法人ふるさと学舎」という日本の伝統文化・芸能振興を目的とした団体の立ち上げにも参加した。

これから予定している展示会は、4月に埼玉県越谷市の「こしがや



足立区での展示会



筑波古民家での展示会